夜の壷

『新墾』53-2号

宙をゆく念ひに渡る歩道橋月には近し人には遠しも

刃磨く夜のこころの鋭きか身を置く位置に月差してくる

背かれて残る一語になほ執し霜月の夜の吾が待ぼうけ

何を区切りに人との訣れ瞑むるに砂のごときものの零るる

誹謗ともききてかなしき道に踏む落葉したたかに象とどむる

冬景　『新墾』53-3号

冬半ば大方の嘘の凍てつきぬほどばしる程言葉のあらな

こころざしなき身の外に雪降りて何に急ぐとすひたすらの冬

吹雪く夜の覚つかなきまでの孤のこころ人へだてきしことの長き悔

冬の陽の光りあまねく身をつつむ送葬の道に泪垂りたり

明日の日もなべて透明にあらしむと夜の眼鏡拭ひて睡る

冬の身　『新墾』53-4号

凍て道に喪ひやすき身の平衡いづれ滅びの過程にあらむ

木の椅子に冬の身ふかく埋めをり夜の影いつも告解を象どる

地球儀を廻せばとどまる瞳の位置に血痕零るるごとき日本

魂の赴くままに在りたれば雪原のごとさやかなる奈落

冬の陽の光りあまねく身をつつみ葬送の道に死者を眩しむ

冬の風車　『新墾』53-5号

石をもて釘打つ頃か冬の死者悼むばかりに廻る風車

冬壮ん煮ゆるひとりの雑炊に花型人参のうすきを散らす

きさらぎの壷に充たせる薔薇の緋よ何に昂ると片頬のほてり

きさらぎの早き夕暮れ疾き闇は躁より鬱へと言葉不甲斐なく

おのづから享くる罰あらば享くるもよし微笑み返す程の罪にて

春の鞦韆　『新墾』53-7号

愛と憎つひに頒け得ず五月ひぐれ疾風の中あはあはと燈ともる

ひと息に漕ぐ鞦韆空に揺れしづまるまでの孤高を保つ

忘れゐし擦傷に沁めばくりやべの暗がりにもつ塩壷おもし

あはただしく天才劇詩人逝く五月麺麭は天火に脹らむばかり

絨毯にとり落したる卵黄を紙に掬ひて春かぎりなし

逝く五月

『新墾』53-8号

暗欝にすぎゆく五月ひ傘の金具いちやうに褐色の銹

男壮年帽子ま深く歩みきてたしかに愛す満天星つつじ

画学生のつひに画かざる裸婦いちにんこころ残りとして五月逝く

藤棚の花の暗がりにこもる風われに戻れぬことのくやしみ

宅急便車なだるるさまに坂をゆく括くられしままの阿鼻叫喚

噴水

『新墾』53-9号

いちはやく池の噴水ふきはじむ雨季より先に髪湿りきて

陽の不在わるびれもなく売台に積まれしままの麦藁帽子

風鈴は冷夏のレクイエム人工芝生の青き飾窓に響りやまず

裏切りは美しくまとめ高層の窓に月射す頃のなま欠伸

鍋にたつ湯気にもたやすく髪しめるをみなの婚期に至らず

冷夏

耳飾り

『新墾』53-10号

けじめとは誠うるさきものならむたとへば耳飾りの右ひだり

足に馴染まざるものとし葬りたりなまなましきばかり夏の靴擦れ

何処までゆきても自動扉一人を想ふ意志の凛凛と掲げむ

逢ふ怖れ訣れのおそれ持ちながらひたすら吾れには幻ならむ

目覚めぬまま逝きたしと希ふ朝々の胸に置く掌の夏は熱しも

耳飾り（二）

『新墾』53-1号

耳飾りの捻子巻くさへ覚つかなくこの指もてのちのち何を祷らむ

こののちもかかるひとりに生くるやと自問自答のひとときの闇

いつよりか身の寂しさに堕ちてゆくサルビアの朱裡に燃やして

パンケースに麺麭あらねば米櫃にこめあらぬより淋しき初秋

まつしぐら孤の旗かざし見返るにおどろおどろの無援と云はむ

葡萄園

『新墾』53-12号

雨の夜の濡れし硬貨に確むるダイヤル廻せば不在のわたし

身のいづくにか湧く不気嫌麺麭店に買ひそびれたるバケット

一本

枯原に玉葱の廃棄堆し規格の外にあらば吾れももろとも

葡萄園にぶだうは乾(か)らびまざまざとかの日の湯滝の際の乳

頭

胸さわぎにかすか揺れゐるペンダント不透明なれよ汝が眸の